柿生文化

平成２２年２月１６日
川崎市立柿生中学校
郷土史料館情報・研究誌
第２０号

柿生「鉄」の系譜 Ⅳ

古代製鉄法タタラの実験に向け本格始動

―― 鶴見川流域の鉄文化の謎を解く ――

◎生徒の活躍で進む砂鉄採取
◎谷川健一 氏の鉄に関する 講演（3／16）

校長　板倉敏郎

今まで「柿生文化」１５～１７号で、鶴見川あるいは柿生に関わる鉄の文化について紹介してきました。

それらの中で、鶴見川流域地域で発見された鉄器や製鉄遺物の原材料が果たして鶴見川流域で採取された鉄であるのか、あるいは他の地域からもたらされたのか、他の地域ならばその鉄はどこからもたらされたのか。これらの謎を解くために実際に鶴見川の砂鉄を採取し、古代製鉄法である鑪（タタラ）で鉄を取り出し、鉄の成分を分析することに挑戦してみることになりました。

（青葉区鉄町付近で砂鉄採取する生徒たち）

現在、生徒有志約２０名と教職員４名で毎週土曜日に鶴見川の亀井橋付近と横浜市青葉区鉄町付近で砂鉄を採取しており、現在まで約２０キロの砂鉄を採取しました。３月２０日のタタラ実験当日までに約４０キロの砂鉄が必要となってきます。砂鉄採取や鉄に関わる歴史の研究に興味があり一緒に活動したいと思う生徒は担任の先生に申し出てください。一緒に活動しましょう。　この研究は、鶴見川文化のルーツを探るうえでもたいへん貴重な研究となってくるもので、古代の鶴見川流域開拓の中心となったと思われる職能氏族である忌部（後に斎部とも称するようになる）氏の活動や忌部氏と関わりの深い杉山神社に関する研究についても興味あるものとなってくると思われます。

このタタラ実験に際し、３月１６日（火）に開催するカルチャーセミナーでは金属に関する歴史や地名、民俗についての研究では吾が国の第一人者でいらっしゃる日本地名研究所長　谷川健一 氏をお招きして「川崎、鉄にまつわる地名と民俗」（仮称）を演題にご講演をいただくことになっています。たいへん貴重なお話をいただけるのではないかと期待いたしております。

また、３月２０日（土）のタタラ実験当日は、東京工業大学名誉教授でありタタラ実験のリーダーとしても活躍されている永田和宏先生と東京大学大学院学術専門支援職員の石井先生にお越しいただきタタラ実験のご指導をお願いしております。当日は、寒さも予想されますので暖かい服装でお越しください。また、実験は早朝８：００から夕刻１６：００頃までかかりますので一日いらっしゃる方は、弁当を持参してください。控え室もご用意いたします。多数の方のご参加をお待ちいたしております。

シリーズ　「麻生の歴史を探る」　第１９話

麻生の神社　―消えた古社―

仏教伝来、古墳から寺院へ。だがそれ以前から私たちの祖先には神への信仰がありました。そのことは遺跡から発見される祭祀用の土偶などで知ることができます。麻生の近隣で今も残る古い神社は稲城百村（黒川の隣村）の妙見宮で、創建されたのは淳仁４（760）年といわれ、前稿「王禅寺の孝謙天皇の御霊夢（757）年」の頃です。今でも毎年八月七日に悪魔払いの「ヘビヨリ行事」の信仰が行われています。平安時代になると朝廷は延喜式の制度で、由緒ある寺院を神名帳に記載し（これを式内社と呼んだ）、全国で 3132 社、武蔵国では 44 社が式内社とされたそうです。前稿「茅ヶ崎の杉山神社」はその一つだといわれていますが、麻生区内には該当の神社はありません。

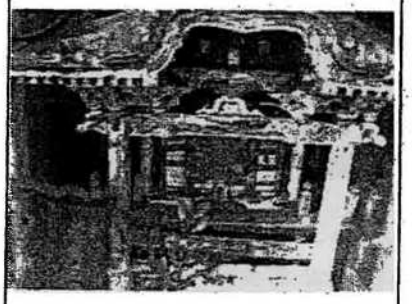
稲城百村妙見宮参道（へび結い）

さて、現在麻生区には 13 の神社があります。しかしそれは明治 39 年に政府が一村一社の「合祀」を布告したからで、それ以前は約 33 社という多くの神社がありました。区内の神社の特色は、創建年度不詳の古社があり、謎を秘めていること。同じ社名が散在していること。そして地域ごとに地縁血縁の氏神様が顕著に存在していたこと等です。

記録によると細山の神明社、黒川の汁守神社、片平の白鳥神社、栗木の御嶽神社は勧進年度不詳の古社の代表格です。神明社は金程、細山の杉山神社二社を合祀しており、汁守神社は武蔵の総社大國魂神社の膳部を司る神とされる古社です。白鳥神社は日本武尊の古事から謎を秘め、御嶽神社は別稿「大麻止乃社」と呼ばれ、麻生の少ない忌部氏との関わりが問われています。

熊野神社は区内に６社ありました。上麻生に２社、片平、古沢、万福寺、高石と旧津久井街道に沿い勧進されていましたが、今は全くその痕跡すら残していません。この神社は平安時代の熊野信仰によるもので、平安末期に紀州名草（現海南市）の鈴木（亀井）の一族がこの地に住み、故郷の氏神を祀ったものといわれています。亀井（鈴木）六郎の亀井城・弁慶の鍋ころがし・二枚橋など、この地に残る六郎・弁慶・義経の伝承を裏付けており、現在麻生に多い旧家の鈴木姓はその末裔と思われています。

岡上の岡上神社は村内にあった地縁血縁の典型的氏神様五社を合祀した神社で、宮野氏の氏神「剣神社」は悪魔除けの戦の神。梶氏の氏神「諏訪神社」は狩猟農耕の神。山田氏の氏神「日枝社」は山と農耕の神。星野、海老沢氏の氏神「宝殿稲荷社」は五穀の神。横田氏の氏神「開戸稲荷社」は五穀の神。というように氏族ごとに祭神の違いを見せております。（ふるさとは語るより）



上麻生熊野神社奥殿

それにしても由緒あったであろう多くの神社が姿を消してしまったことは残念なことです。

文、小島一也氏

ある歴史のエピソード１

明治６年 太陰暦から太陽暦へ

その真相と混乱 Ⅰ

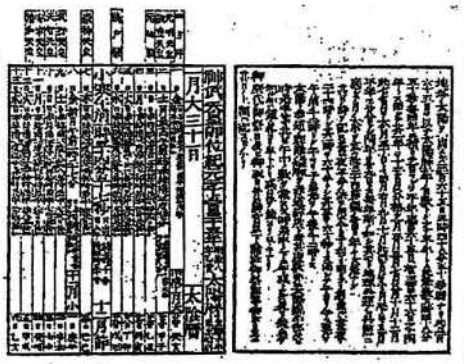
明治５年１１月９日、突然、思いもよらぬ布告（太政官布告）が明治政府からだされました。内容は「今後、太陰暦を止め太陽暦とし、今年（明治5年）の１２月３日を明治６年正月元日にする」というものでした。

現在、私たちが使用している暦は「太陽暦」で、地球が太陽のまわりを一周する期間（３６５日）を１年としています。しかし日本で明治５年（1872年）まで使用していた暦は「太陰暦（たいいんれき）」でした。

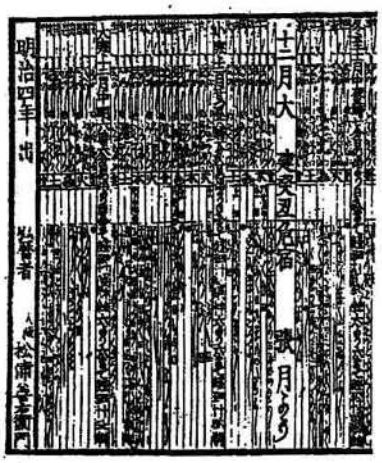
これは月の満ち欠けをもとにしています。満月から次の満月までの２９．５３０５９日をもとに１年間を１２ヵ月に分けていました。しかし、これでは１年間は３５４．３６７０８日になるので太陽の動きとの間にずれがでてきます。そこで３年に一度閏年を設けて１年間を１３ヵ月にしていました。例えば１２月が２回あったりするわけです。

こんな状態ですから、①外国と貿易や交流するうえで不便である。②太陽暦を使わないと遅れた国であると思われる。③明治維新で人心一新する。④太陰暦では３年に一度１３ヵ月あり不便である。等の理由であったようです。

しかし、政府が最も目を付けていたことは、④の理由であったようです。それは、新政府に変わって明治４年から役人に対する年払いの給料が月給制に変わり、明治５年１２月の給料を支払わなくてよいと考えたのが真相のようです。太陽暦移行の混乱や影響は、次回、当時の新聞などで紹介いたします。



（明治8年の「太陽暦」）



（明治5年発行の「太陰暦」二左は１２月の部分ですが実際には、この１ヵ月は、仮版カットされたことになる）

第２０回 カルチャーセミナー ご案内

日本民俗学の権威が明かす鉄の伝承

◎日　時　3月16日（火）
　　18：00～

◎場　所　柿生中学校　視聴覚室

◎テーマ　「川崎 鉄にまつわる地名と伝承」

◎講　師　谷川 健一 氏
・現、日本地名研究所長
・元、近畿大学教授
・同大学付属民俗学研究所長

第２１回 カルチャーセミナー ご案内

古代製鉄法を現代に復元

◎日　時　3月20日（土）
　　8：30～16：30

◎場　所　柿生中学校　校庭

◎活　動　「古代タタラ製鉄の実験」

◎指　導　永田 和宏 氏
・東京工業大学名誉教授
・東京芸術大学教授
・ものづくり教育たたら

石井 隆昭 氏
・東京大学大学院工学系研究科学術専門支援員
・ものづくり教育たたら

郷土史料館「史料」の寄贈・寄託のお願い

今年、完成する本校の「郷土史料館」に収蔵する柿生・岡上に関する歴史的資料を探しています。ご自宅で保存されている史料（古文書や生活道具類）でお譲りいただけるものや、一時、お貸しいただけるものがございましたらお知らせください。しっかりとした管理体制で収蔵します。よろしくお願いいたします。

このような史料はありませんか

◎古代の「縄文土器・弥生土器」「石器」「土師器」「須恵器」
◎江戸時代の「検地帳」・「水帳」・「五人組帳」・地域の「絵地図」
◎江戸時代の「高札」（慶応４年の太政官布告「五榜の掲示」など）
◎江戸時代の寺子屋や私塾で使用した教科書・手本「各種往来物」
◎江戸時代の「藩札」「通行手形」
◎明治期発行の「地券」　◎明治期の「自由民権運動」史料
◎明治・大正・昭和（戦前・戦中）の「国定教科書」・「新聞」
◎小型の農具「千歯こき」「備中鍬」「からさお」
◎各時代の「古銭」「生活古民具」（矢立て・印籠・火打ち・鏡・装束など）
◎その他各種史料「各種古文書類」「美術品」

寄贈・寄託していただける史料がありましたらご一報ください。
柿生中学校　044－988－0004　黒川まで

町内会・自治会を通してお願い文を配布したり、柿生郷土史料館設立準備委員が直接、地域をまわり、お願いにあがります。ご協力お願い致します。